

二〇二二年三月四日

小流れに躍る陽射しや藻草生ふ
しばらくはこのままにせん落椿
寄り道を叱られてゐる遅日かな
海坂に春の入日の柔らかし
深呼吸 吸 啓 蟄の窓全開す
落椿寧かれとわが手のひらに
飛機雲二本溶けゆく春の空

二〇二二年三月三日

耳元で確かめ開く種袋
桃の花過疎となりたる本籍地
酔ひたるは女ばかりや雛の家
うすうすと山笑ふ日となりにけり
ちらし寿司うずら卵の雛添へ
集ひしは昔乙女の雛の宴
啓蟄や欠片繫げば火焰土器

二〇二二年三月二日

余白なき伝言板や春時雨
うららかな日や外つ国は戦火なる
海の香を天日に広げひじき干す

二〇二二年三月一日

春キャベツ剥けば青虫転げ落つ
引き揚ぐる小舟に光る若布かな
せめぎ合ふ渦の落差や春の潮

智恵子

せいじ

ひのと

凡士

あひる

満天

あられ

みきお

凡士

ひのと

素秀

やよい

もとこ

凡士

満天

もとこ

みきお

智恵子

みきお

千鶴

虹が出てゐますよとバス止まりけり

二歩下がり仰ぐ白梅空真青

涅槃絵図象仰向けに嘆きをり

二〇二二年二月二八日

蹲踞の水を貫く春日かな

野に遊ぶまた同じ子が鬼となり

補助輪の子の背を押して春堤

散り敷くは古墳の径の落椿

耕人の鋤を杖とす桃の樹下

二〇二二年二月二七日

手の平を添へて大樹の春を聞く

片足で艀を漕ぐ漁師若布刈舟

愛称はいねむり観音梅日和

受験絵馬掛けて隣の絵馬読めり

二〇二二年二月二六日

春ぼこり拭いて地球儀回しけり

斜張橋弦かき鳴らし春疾風

舞ふ人の影しなやかに春障子

ひのと

なつき

たか子

ぼんこ

ひのと

素秀

和子

素秀

豊実

みきお

たか子

なつき

あひる

凡士

ひのと

毎日句会みのる選・二〇二二年三月六日